

Title	〈阪大ならではのアウトリーチ活動〉のかたちをさぐるFDワークショップ：スタートアップ編
Author(s)	松川, 絵里; 平川, 秀幸; 森栗, 茂一 他
Citation	Communication-Design. 2012, 6, p. 85-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4279
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈阪大ならではのアウトリーチ活動〉のかたちをさぐる FDワークショップ －スタートアップ編－

松川絵里（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

平川秀幸（大阪大学CSCD）

森栗茂一（大阪大学CSCD）

西村ユミ（大阪大学CSCD）

Faculty development workshop for HANDAI-style outreach

Eri Matsukawa (Center for the Study of Communication-Design : CSCD, Osaka University)

Hideyuki Hirakawa (CSCD, Osaka University)

Shigekazu Morikuri (CSCD, Osaka University)

Yumi Nishimura (CSCD, Osaka University)

コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）では、アウトリーチ活動に関心のある大阪大学の教員、職員、ポスドクを対象に、具体的な企画の立案・実施、アウトリーチの多彩な「メニュー」と「レシピ（実施マニュアル）」の作成・共有を目指すワークショップを開催した。本稿ではその概要と、第1回「スタートアップ編」の内容と成果、今後の課題を示す。

キーワード

アウトリーチ、ファカルティ・ディベロプメント（FD）、ワークショップ
Outreach, Faculty Development, Workshop

1. 大学の「社会貢献」と「アウトリーチ活動」

近年、大学の「社会貢献」に期待が高まるなかで、個々の研究者にも一般の市民との「対話」を通じて、研究の目的や成果の意味について説明したり、市民のニーズや問題意識を研究者が共有したりする「アウトリーチ活動」が求められるようになってきている。

政府の総合科学技術会議では、2010年6月、「『国民との科学・技術対話』の推進について（基本的取り組み方針）」を発表し、大型の研究プロジェクトにアウトリーチ活動を半ば義務づけるなど、今後さらにそうした活動を促進する方針を打ち出した。そのなかで、科学技術政策担当大臣および有識者議員は、「研究活動の内容や成果を社会・国民に対してわかりやすく説明する、未来への希望を抱かせる心の通った双方向コミュニケーション活動」を「国民との科学・技術対話」と位置づけ、関係府省・配分期間において今後取り組むべき事項として、以下を掲げている。

「①当面、1件当たり年間3千万円以上の公的研究費（競争的資金またはプロジェクト研究資金）の配分を受ける研究者等に対して、「国民との科学・技術対話」に積極的に取り組むよう公募要項等に記載する。

②配分する直接経費の一部を、『国民との科学・技術対話』に充当できる仕組みの導入を進める。」（総合科学技術会議 [2010：2]）

こうした流れのなか、全国各地でサイエンスカフェと呼ばれる対話型のイベントは年間1,000件以上開催され、大阪大学でも様々なかたちで大学と社会をつなぐ実践が試みられている。

しかしその一方で、研究者の側では、戸惑いや疑問の声も多い。「アウトリーチをやってみたい、やらなければならないと思うけれど、具体的にどうしたらよいかわからない」、「人はちゃんと集まるのか?」、「従来のような公開講座やシンポジウムではいけないのか?」などである。

そこで、コミュニケーションデザイン・センターでは、大阪大学内のアウトリーチ活動および社会学連携事業の窓口となっている21世紀懐徳堂と協力し、アウトリーチ活動に関心のある大阪大学の教員、職員、ポスドクを対象に、ファカルティ・ディベロップメント（FD）として、〈阪大ならではのアウトリーチ活動〉を探るワークショップを学内で行うことにした。

2. スタートアップ編の目的と概要

このワークショップの目的は、これまで各部局・各研究室で行われてきたアウトリーチ活動について実態を把握し、今後「大阪大学として」その資源やノウハウ、課題を共有し活用できるような体制を調えることにある。最終的な目標は、具体的な企画の立案・実施、アウトリーチの多彩な「メニュー」と「レシピ（実施マニュアル）」の作成・共有である。もちろんこれは、1日のワークショップで一足飛びに可能になることではない。

そこで、私たちはこの取り組みをシリーズとして継続的に展開することを念頭に置き、2011年3月に「スタートアップ編」を実施した。その目的とプログラム内容は以下のとおりである。

スタートアップ編の目的

- ・学内の各部局、研究プロジェクト、研究室などでこれまで行ってきたアウトリーチ活動の経験を共有。

- ・「研究を社会・市民に伝える」「研究と社会・市民をつなぐ」ということについて、問題意識やアイデアの共有。
- ・学内連携のためのネットワークづくり。

プログラム

- 1) 趣旨説明と参加者の自己紹介 (10:00～10:40)
- 2) アウトリーチ経験者からの報告と問題提起 (10:40～12:10)
- 3) アウトリーチの課題の発掘と共有のためのミニワークショップ (13:10～17:10)
- 4) 振り返り (17:10～17:30)

3. アウトリーチ実践者からの実践報告

午前中のプログラムでは、大阪大学で行われているアウトリーチの実践者から、実践報告と問題提起が行われた。

3.1 大型教育研究プロジェクト支援室の実践

大型教育研究プロジェクト支援室からは、CSCDなどと共催で、2010年11月より複数回にわたって開催したサイエンスカフェ「カフェ・オンザエッジ」について報告された。

コーディネーターとして関わった岩崎琢哉（大型教育研究プロジェクト支援室／特任講師）は、サイエンスカフェ実現のために必要な要素として「説得、企画、集客、調整、実行」の5つをあげ、実際に使われた機材のリスト、物品発注リスト、受付マニュアルなどを例にその具体的な方法を解説した。そのなかで、サイエンスカフェの実施にあたって利用したラボカフェというインタフェイスが、企画に最適な場所と集客に必要な広報システムを調べていることを評価する一方で、学内周知が不十分であることを指摘した。さらに、「説明責任であるアウトリーチと生産であるコミュニケーションは、目的が異なるのではないか」と疑問を投げかけた。

片桐良実（大型教育研究プロジェクト支援室／事務職員）は、大阪大学の大型教育研究プロジェクト支援室設置の背景やその役割について報告した。その特徴は、教員と事務職員が仕事を完全に分担するのではなく、話し合いながら共同でアウトリーチ活動に取り組める点にある。そして、支援室の設置によって事務職員がサポートできる範囲は格段に広がったという。

アウトリーチ活動の事務支援一覧⁽¹⁾

- ・活動の申請・報告業務
- ・広報活動
 - チラシの作成、送付業務
 - ホームページの作成・公開
- ・出張手続き（出張依頼を含む）
- ・必要物品の調達・支払い手続き
- ・当日の実施要領（マニュアル）作成
- ・アンケートの作成・修正
- ・参加申し込みの受付・参加者名簿の作成
- ・当日の受付・実施業務

3.2 CSCD の実践～大学と社会をつなぐインタフェイスのデザイン

次にCSCDからは、知デリ、ラボカフェ、大阪大学歴史教育研究会の実践が紹介された。

知デリ（アート&テクノロジー知術研究プロジェクト）とは、大学と社会が連携して、アートや科学技術、文学など、様々な領域で活躍するゲストを迎え、表現や技術について語り合うトークプログラムである。それぞれの専門領域における「知術」（知識と技術）を参加者と横断・交換し、新しい発想の創出やアイデアの実現につなげることを目指し、毎回、ある仮説的テーマをもとに大阪大学の教員とアーティストとの異領域の出会いをプロデュースしている。2007年からは学生による企画・運営も行われている。

ラボカフェは、京阪電車なにわ橋駅構内のアートエリアB1で開催しているレクチャー&トークプログラムである。大阪大学の教員らがカフェマスターとなり、毎回、哲学、アート、科学技術、鉄道、マンガ、スポーツなど、それぞれのテーマ・領域ごとにカフェプログラムを提供している。21世紀懐徳堂が窓口となり、学内公募も実施している。

大阪大学歴史教育研究会は、高校教員、大学教員、大学院生など30～40名が集まり、「わかる・面白い・役に立つ歴史の発信」を目指して活動している。その背景には、歴史研究の急速な発展、研究の蛸ツボ化、社会の変化に対応した歴史像の必要性などがある。また、期待される成果として、全国レベルでの高校教員のネットワークの形成、ヒストリー・コミュニケーターの養成などが挙げられた。

木ノ下智恵子（CSCD／特任准教授）は、CSCDの役割を「大学と社会をつなぐインタフェイスのデザイン」にあると述べ、それぞれのテーマに応じたインタフェイスの必要性、今後の課題としては学内連携と学内周知の強化の必要性を指摘した。

4. アウトリーチの課題の発掘と共有のためのミニワークショップ

午後のプログラムでは、(1) 組織や立場の違いを超えて知識や考えを共有しアウトリーチ活動の「悩み」「課題」「思い」を整理する、(2) 対話的なイベントのファシリテーション技法などについて体験的に学ぶ、という目的のもと、神戸まちづくりワークショップ研究会の協力のもと、ミニワークショップを実施した。

4.1 自己紹介シートを用いた自己紹介

「私の名前は～です。」「所属は～です。」「生まれは～です。」「ふるさとの名物、美味しいものでオススメは～です。」「ところで、こう見えても私は～。」という5つの項目が書かれた自己紹介シート（A4）を各自記入し、それを読み上げる形で自己紹介を行う。各自の持ち時間は30秒である。

このような自己紹介シートを用いた自己紹介には、短時間で互いについて知るだけでなく、初めての人がたくさんいる場で緊張を解き、場を和ませる効果がある。実際、参加者の様子を見ると、「生まれは広島。ふるさとの名物はお好み焼き。お好み焼きは広島が一番」という発言にブーイングが起きたり、「こう見えても、趣味は山登り。ただし、1,000m以下」という言葉に笑いが起きたりして盛り上がっていた。これらの発言は、今回のテーマである

【阪大ならではのアウトリーチ活動】
 のかたちをさぐるFDWS
 2011年3月8日
 自己紹介シート



私の名前は _____ です。

所属は _____ です。

生まれは _____ です。

ふるさとの名物、美味しいものでオススメは _____ です。

ところで、こう見えても私は、
(趣味・特技・変わった資格など、ちょっと自慢してみたいこと)

 _____ なんです。

【図1】 自己紹介シート（作成：神戸まちづくりワークショップ研究会）

アウトリーチ活動とは全く関係のない内容だが、一度にたくさんの初対面の人を覚えることができるうえ、教員と事務職員など異なる立場の人が立場を超えて話し合う雰囲気を瞬時に作り出すことができる。

4.2 「今日話したいこと」を決める

午前中の発表と質疑応答のキーワードを参照しながら、「今日話したいこと」を各グループから2つずつ「今日話し合いたいこと」を提案する。その中から、各自2つずつと投票し、多数決によって「アウトリーチは、生産か責任か」、「そもそも、なぜアウトリーチが必要なのでしょうか?」、「アウトリーチに必要な戦術と戦略はどのようなものなのでしょうか?」の3つのテーマが選ばれた。

4.3 ワールド・カフェ

「ワールド・カフェ」とは、アニータ・ブラウンとデイビッド・アイザックスによって1995年に開発・提唱された、新たなアイデアを創造する会議手法の一つである。旅をするようにテーブルを移動し、4~5人の少人数によるセッションを繰り返しながら、多くの人との対話を可能にする。

進行「会話の旅をしましょう。みなさんのテーブルひとつひとつが旅の宿だと思ってください。宿には主が必要ですね。主ですから、旅人をもてなします。主はそこで話し



【図2】「今日話したいこと」を考える



【図3】「今日話し合いたいこと」に投票する



【図4】 ワールドカフェの様子

たことを、次の方に話してください。一人だけ主になったら、残りの人は旅人になりま
す。旅人は土産話をしてください。」

各テーブルには模造紙が敷かれ、「旅の道具」として自己紹介シート、ペン、飲み物が配
られる。

進行「テーブル上のシート（模造紙）は、らくがき帳のようなものです。らくがきな
ので、きたなくてもなんでもいいです。次にきた旅人に『これ、なに？』と尋ねられ
たら、主が答えてあげてください。」

今回は、4人グループが8つつくられ、20分のセッションが3回行われた。

第一の旅「アウトリーチは、生産か責任か」

「アウトリーチの意味は？」、「アウトリーチのために研究そのものができなくなつては本
末転倒。優先順位は？」、「若手研究者はサイエンスカフェに、年長者はシンポジウムにと棲
み分けしてはどうか」など、同じテーマでも話の内容は各宿で異なる。

らくがき帳の使い方も様々である。話した内容を覚え書きのように少しずつらくがきする
宿もあれば、各自がバラバラにらくがきをする宿もある。話に夢中でなかなからくがきが進
まない宿もあった。

第二の旅「そもそも、なぜアウトリーチが必要なのでしょう？」

旅人は別のテーブルに旅立ち、主が残って新しいメンバーでセッションを行った。

ある宿では「アウトリーチができる人は研究もできる。自分の研究のアピールポイントをよく知っているから」、別の宿では「役に立つ」ということについて、「ヨーロッパでは芸術や文学を楽しむことが第一価値として置かれている。技術はそのためのものに過ぎないから、『役立つ』という価値観は二次的なものになる」と日本とヨーロッパのちがいが話題になった。

第三の旅「アウトリーチに必要な戦術と戦略はどのようなものでしょうか？」

旅人はもとの宿に戻り、宿の主は先ほど旅人からきいた話を、旅人は別の宿で話した内容を伝えながら、テーマについて考える。

第一セッション（第一の旅）で話がはずんでいた宿「後藤の家」では、「本当にアウトリーチをやりたい人っているのかな？」と考え込んでしばしの沈黙。

逆に第一セッションで静かだった宿「402亭」では、「どうしたらサイエンス・コミュニケーションが育つか」を話題に盛り上がる。「冬の宿」では、ネットワークづくりが話題になる。

4.4 まとめ

最後に、ワールドカフェを通じてアウトリーチについて得たもの、わかったこと、気づいたことを各自あげ、内容が近い者同士でグループをつくってまとめた。

- ・わくわくドキドキ市民と学者の楽しい出会い。
- ・アウトリーチはいろんな部署で行われているが、「阪大」としてまとまっていない。戦略をたててまとめていく努力が必要。→そのための組織
- ・アウトリーチは方法・成果ともにいろいろあってよい。（だけでなく）やってよい。
- ・アウトリーチは必要（らしい）でも、あなたは独りでアウトリーチできるんですか。ファシリテーターが必要です。
- ・主催者と聴衆の共有と共感
- ・大学は客を選べない⇔需要と共有のバランスはやはり大切！
- ・まきこみが大事。
- ・双方向なので、アウトリーチという言葉が悪い。
- ・自分の立ち位置がみえた。
- ・事務職員の方の話がきけてよかった。（大学内でのコミュニケーションがとれてないのに、外にでていくのはどうか）
- ・アウトリーチをおこなうには、ある程度の安定（時間、お金など）ときっかけが必要。経験（若手育成）も必要！

- ・必要があるなら、まずやってみよう。
- ・アウトリーチは、生産であり責任である。(税金だから、ではなく、アウトリーチは研究の外にあるのではなく、知的生産の一部)
- ・市民の声をききたい。(大学関係者だけでアウトリーチについて話し合うことの限界)

5. スタートアップ編の成果と今後の課題

最後に、上記の実践報告、ミニワークショップにおける発言と、参加者へのアンケートから、今回のスタートアップ編の成果と今後の課題を示しておこう。

5.1 部局・職種を超えた参加者たち

今回のFDワークショップの最大の成果は、部局・職種を超えた参加者が集い、互いの活動、学内での役割、関心、抱えている問題を共有できたことだろう。

同じプログラム内容でも参加した人の所属に偏りがあるようでは、学内連携のためのネットワークづくりという意義が半減してしまう。今回のFDワークショップには、様々な部局に参加を呼びかけるよう努めた結果、9つの部局から参加者が集まった。

また、研究者だけでなく事務職員にも参加を積極的に呼びかけた結果、大阪大学のアウトリーチ活動および社会学連携事業の窓口を担う21世紀懐徳堂、研究者の側からアウトリーチ活動を支援する大型教育研究プロジェクト支援室を中心に、計8名の事務職員が参加した。この意義は大きい。アウトリーチ活動や社会学連携を実行するにあたっては、研究者が用意するコンテンツだけではなく、それをいかに市民の手に届く状態で用意するかということも重要である。そのために事務職員の協力は欠かせない。今回、大型教育研究プロジェクト支援

【表1】FDワークショップの参加者（所属別）

所属	参加数
コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）	14
大型教育研究プロジェクト支援室・支援事務室	7
文学部・文学研究科	4
工学研究科	3
21世紀懐徳堂	2
医学部・医学研究科	2
人間科学部・人間科学研究科	2
免疫学フロンティア研究センター	1
NPOおおさかシニアネット コンソーシャム関西	1

【表2】FDワークショップ参加者（職種別）

職種	人数
教授	6
准教授	9
助教	6
講師	4
研究員	3
事務職員	8

室のような専用の部局の設置によって事務職員がサポートできる作業が格段に増えること、「サポートしたいが教員の関心がわからず困っている」、「これまで問題を感じていても、事務職員が発表する機会がなかった」といった問題が明らかになった。これを機に、事務職員を交えたネットワークの構築が期待される。

5.2 学内広報と部局を超えた連携の必要性

実践報告で取り上げられたラボカフェや知デリの実践については、いずれもその内容が評価される一方で、「初めて知った」「関心はあるのに今まで知る機会がなかった」といった声が相次いだ。これは、学内周知が十分に行き届いていないことを示している。

また、ラボカフェを主催しているCSCDと学内公募の窓口となっている21世紀懐徳堂の関係が不明確で見えにくいという指摘も多く寄せられた。今後、CSCD、21世紀懐徳堂、そして大型教育研究プロジェクト支援室などアウトリーチ活動や社会学連携に関わる部局が、それぞれの役割を明確にし、連携して学内広報を展開してゆく必要がある。

5.3 「アウトリーチ」という言葉は適切か？

今回のプログラムタイトルについては、企画時に「社会学連携」という候補もあがったが、この言葉を知らない人も多いのではという懸念から、一般的に普及している「アウトリーチ」という言葉が採用された。しかし、参加者からは「アウトリーチ」という言葉の使用について、次のような違和感を示す声もあがった。

- ・「アウトリーチ」という言葉は、CSCDが実施しているような双方向型のコミュニケーションにはそぐわないのではないか。どちらがアウト（外）かということになる。
- ・日本での「アウトリーチ」という言葉遣いは、ヨーロッパと異なる。
- ・アウトリーチは説明責任であり、コミュニケーションは新たな発想を生み出す生産である。科学技術コミュニケーションは、アウトリーチではない。

5.4 共有や共感ではないやり方

第1回となる今回のスタートアップ編では、アウトリーチ活動に関する経験、問題意識、アイデアの共有を目的とした。しかし、すでに参加者からは、アウトリーチ活動そのものや、そのための学内連携において、共有と共感を探る以外の方法を求める声もあった。

- ・研究と社会の間には、「わくわくドキドキ」も必要だが、それだえではない。たとえば、原子力に関わる問題については、双方の利害関係者が「答えは決まっている」と主張し、最初から対立関係にある。共有と共感ができないことを前提にどうするか考える必要がある。
- ・ワークショップ全体を通して色々な人の関心を聞いたことはよかったが、プログラムがアウトリーチについて何を共有しているかという方向に設計されていたのは残念であった。このようなやり方で見えてくることもあるが、見えにくくなることもある。

私たちは、大学と社会をつなぐインタフェイスのデザインのために、今後、継続してこのようなFDの機会を設け、将来的には具体的な企画の立案・実施、アウトリーチの多彩な「メニュー」と「レシピ（実施マニュアル）」の作成・共有につなげたいと考えている。

今回、アウトリーチ実践者による発表のなかで明らかになったような学内で利用できる物理的・人的・知的な資源とその情報については、今後それを部局・職種を超えて共有できるようなシステムづくりに力をいれるべきだろう。しかし、ワールドカフェで議論したような「アウトリーチは、生産か責任か?」「そもそも、なぜアウトリーチが必要なのか?」「アウトリーチに必要な戦術と戦略はどのようなものか?」といった問題については、各々の考えの共通点を探るだけでなく、その相違点にも注目すべきではないだろうか。重要なのは、実施者がそれぞれの目的やテーマに適した「メニュー」と「レシピ（実施マニュアル）」を選択できるような環境をつくることである。「阪大らしいアウトリーチ(?)活動」のポイントは、おそらく、プログラムの統一などでは決してなく、実施のために利用可能な資源の共有とプログラムの多様性を可能にする学内ネットワークづくりにあるのだろう。

注

- (1) 片桐良実（大阪大学研究推進部 大型教育研究プロジェクト支援事務室 専門職員）作成

文献表

アニータ ブラウン・デイビッド アイザックス（2007）『ワールド・カフェ～カフェ的会話が未来を創る』ヒューマンバリュー。

木ノ下智恵子 (2010) 「総合大学の資産を運用して企てを画く：社会学連携による文化事業の研究開発」, *Communication-Design*3, : 112-121.

総合科学技術会議 (2010) 「『国民との科学・技術対話』の推進について (基本的取方針)」.